

「悪」の傍らで考える



1

地元山口での集まりがあった時など、那須さんはお酒が回っていると、私に向かつて「あんたの書くもんはどうもまじめすぎないかん。会うたらおもしろいの、なんでそんな風にならぬのかねえ」とおっしゃっていた。

改めて記すまでもなく、那須さんは、広島で生まれ三歳の被爆経験を出発点に、反戦・反権力の思想を最後まで貫いた。九条の会での活動や生活の根拠地となった山口でのさまざまな住民運動の支援・発言等を通し、文学関係の人に限らず広く一般市民にも知られていた。そして、私を含め山口で子どもに関わる文化活動をしている者たちはみな本気で「那須さんさえてくれればわたしたちは間違った方向へ進まなくてすむ」と信じていた。

そんなぶれない生活者としての姿勢とは別に、創作活動の中で闘いの手法は、多彩であった。初期作品の『屋根裏の遠い旅』（偕成社 一九七五）に代表されるように、

村中 李衣



日本や世界が過去に冒してきたことよって弱い者たちがどんな悲惨な目にあつてきたのかという悲劇の伝承に収まりがちな日本の児童文学の枠を壊し続けた。ミステリー・動物記・時代小説・エンターテインメント作品などあらゆるジャンルでの挑戦。それは、子どもたちが自ら手に取り面白がつて読むうちに「今ここに巣くう悪の火種」を知つていく仕掛けであつたように思う。自分たちのやつてきたことを棚に上げ、大事なことを教えるから真面目に聞いておくと上から語る大人たちとは一線を画し、地に足をつけた作家でもあつた。

振り返つて考えるに、那須さんが私におっしゃっていたことは、まじめなものを書くなどという事ではなく、まじめなことを伝えたいときこそ、その方法を徹底的に考え抜かなければダメだということだつたのだと思う。

今回私に与えられたテーマは、那須作品における「悪」・「闘」の描かれ方についてである。多岐にわたる意欲的な